九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ダルマキキールティの聖典観 : 『プラマーナ・ヴァールティカ』第1章および自註の和訳（4）

大前, 太

https://doi.org/10.15017/2328518

出版情報：哲學年報. 49, pp.43-60, 1990-03-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

ダルマキールティの聖典観

—『プラマーナ・ヴァールティカ』第1章および自註の和訳(4)—

大前　太

目　次

Ⅳ. 字音の非人為性を否定する。(第247偈 ab)
Ⅴ. 文章の非人為性を否定する。(第247偈 cd－第268偈)
1. 字音とは別個の文章の非人為性を否定する。(第247偈 cd－第258偈)
1.1. 字音とは別個の文章は認識されない。(第247偈 cd)
1.2. 文章が部分をもつ場合。(第248偈－第250偈 ab)
1.2.1. 部分がそれぞれ意味をもたない場合。(第248偈)
1.2.2. 部分がそれぞれ意味をもつ場合。(第249偈－第250偈 ab)
1.3. 文章が部分をもたない場合。(第250偈 cd)
1.4. 文章が非恒常的なものである場合。(第251偈 ab)
1.5. 文章が恒常的なものである場合。(第251偈 cd－第252偈)
(未完)

和　訳

Ⅳ

(G.126, 16; M.84, 22; P.304,4)

さらにまた，この者［＝ヴェーダ聖典の信奉者］が非人為性を論証するとすれば，諸字音の［非人為性を］論証するか，文章の［非人為性を］論証するか，いずれかであろう(1)。

そのうち[2]，

> ［ヴェーダ聖典の諸字音は］他方［＝世間の諸字音］と区別されないのであるから，諸字音の［非人為性を］論証したとして，何の利益があろうか。
> ［第247偈 ab］

実に，世間においてもヴェーダ聖典においても字音が異なるということはない[3]。そして，［ヴェーダ聖典の字音が世間の字音と異なるとすれば，］相違がある場合でも［再認知が存在することになり，そして，］再認知には区別がないのであるから，そ［のような逸脱した再認知］にもとづいて［ヴェーダ聖典の字音の］同一性が成立することはないという過誤に陥ることになる［という理由］で[4]，また，［世間の字音とヴェーダ聖典の字音の］相違が認知されない［という理由］で，［世間の字音と異なる］ヴェーダ聖典の字音は成立しないのである。［他のものについても］再認知にもとづいて［同一であると］認識されることがないという過誤に陥ることになるからであり[5]，また，［世間の字音とヴェーダ聖典の字音が］異なるということを［ミーマーンサー学派自身］承認していないからである。そして，それら［諸字音］の非人為性が論証される場合には，それら［諸字音］は［世間においてもヴェーダ聖典においても］すべてにおいて等しいのであるから，この者［＝ミーマーンサー学派の者］によっていかなる［人為的な字音］が残されるのか。そして，このようにして，すべての言語活動が非人為的なものとなる。しかし，すべてが真実であるというわけではない。したがって，［非人為性を論証するために］努力するのは無益である[6]。

V

1.（G.126, 24; M.84, 28; P.304,10）

もし，文章が非人為的なものであるとみなされるならば[7]，

1.1.

諸字音とは別個に文章が存在するのではない。なぜなら，[そのような文章は]認識されないからである。[第247偈 cd]

実に，Devadatta 等の単語や文章において，d 音等の顕現以外に，別の顕現［すなわち単語や文章の顕現］を我々は知識に見ない。例えば第二の字音の顕現のように[8]。そして，把捉されうるとみなされているものが知識に顕現していないときには，“存在する”と，あるいはまた“別個のものである”と確定することはできない。別の形象のように[9]。

［**反論：**］「［意味を理解させるという］他のもの［＝字音］にはありえない結果が［字音とは別個の単語や文章を］知らしめる根拠である。」と言うならば。

［**答：**］もし，それら諸字音が存在しているのに，［意味を理解させるという］その結果が存在しないのであれば，これ［＝字音とは別個の単語や文章］が存在することになろう。［しかし，実際には諸字音にもとづいて意味が理解されるのである。］

［**反論：**］「［諸字音にもとづく意味の理解は］存在しない。なぜなら，それら［諸字音］に区別がないのに，別の単語や文章においては［同じ意味の理解は］存在しないからである[10]。」と言うならば。

［**答：**］そうではない。なぜなら，それら［諸字音］が［別の単語や文章において］区別されないということが成立しないからである[11]。

［**反論：**］「［単語や文章ごとに諸字音が］区別されないということは再認知にもとづいて成立する[12]。」と言うならば。

［**答：**］そうではない。なぜなら，それ［＝再認知］には逸脱があるからであり[13]，また，実例がないからである。

［字音の相違にもとづく意味の理解の相違が承認されないのであれば，］字音に区別がない場合でも，［それとは別個の］文章の相違にもとづいて［意味の］理解の相違という結果の相違が起こるであろう。そして，［このようにして］それ［＝意味の理解］は［そのような］文章にもとづく［ことになろう］。

しかし，それ［＝文章は］超感覚的なものであるから，何ゆえに［文章にもとづいて意味が理解される］であろうか。［感覚器官がそうであるように］存在のみ（sannṃnidhimātra）によって［文章が意味の理解を］生起させるとすれば，［協約を］習得していない者でも[14]［文章を聞いただけで意味を］理解することになろう。［しかし，実際にはそのようなことはないのである。］それゆえに，文章という字音とは別個の事物は決して存在しない，［もしそれが存在するのであれば，］その非人為性が論証されるべきでもあろうが。それ［＝文章］が存在しないのであるから，［字音のみが残されることになり，そして字音はすべてにおいて区別されないのであるから，］ヴェーダ聖典に限定されない［すべての］字音の非人為性［を論証せねばならなくなるが，それについて］は，［字音の非人為性の論証という］最初の論題においてすでに返答している[15]。

1.2.（G.127, 16; M.85, 10; P.304,21）

さらにまた，［諸字音とは］別個の事物である文章が存在するとしよう。［その場合に，］それ［＝文章］は，多くの部分より成るか，あるいはまた部分をもたないか，いずれかであろう。

1.2.1.

［文章が］多くの部分より成る［と考えた］場合に，それら［諸部分］がそれぞれ意味をもたない［とすれば］。［第248偈ab］

また，それ［＝文章］の部分が多であるとして，もしそれらがそれぞれ本性的に意味をもたないならば，

そして，その本質［＝意味を表示する本質］をもたない［部分］におけるそのような本質［すなわち意味を表示する文章の本質］は，構想されたものである。例えば［少年等における］獅子性等［の性質］のように[16]。［第248偈cd］

文章とは意味をもつ［すなわち意味を表示する，語の］本体に他ならない。そして，［文章の］それら諸部分はそれ自体意味をもたない。それら［意味をもたない諸部分］におけるその本体［＝意味をもった文章という本体］は概念知によって構想されたものであろう。少年等における獅子性等の［性質が構想されたものである］ように。したがって，［意味をもった本体すなわち文章は，概念知によって構想されたものであるから，］人為的なものに他ならない。

1.2.2.（G.127, 23; M.85, 16; P.305,9）

このような過誤があってはならないというわけで，それら［文章の］諸部分がそれぞれ意味をもつとみなされるならば，

> ［文章の諸部分が］それぞれ意味をもつとしても，［文章が］多数［の部分］より成るという想定は誤りである。また，一つの部分が認識されることによって，文章［全体］の意味が理解されることになるであろう。［第249偈］

実に，文章とは完結した意味をもつ語の本体である。そして，［文章の］それら諸部分はそれぞれそのようなもの［すなわち，完結した意味をもつもの］であるから，それら［諸部分］はそれぞれ文章である［ことになってしまう］。そして，このようにして，多くの部分より成るものは［単一の］文章ではない［ことになる］。また，一つの部分が認識されることによって［文章全体の］意味が理解されることになるから，他の部分を必要とすることも，時間を費やすこともないであろう(17)。なぜなら，部分をもたないそれ［＝文章の意味(18)］は一瞬に理解されるからであり，［その理由は］一つの知識が生起した場合に［文章の意味は］残りなく理解されるからである(19)。そうでなければ［すなわち，一つの知識においてすべてが理解されるのでなければ］，［理解されているものと理解されていないものという相反する二つのものがあるということになるが，それらが］同一であるというのは矛盾であるからである(20)。

また，[文章の] すべて [の部分] が同時に聞かれるとすれば，[そのときでも] 時間の区分は理にかなっていない。[第250偈 ab]

他の部分を必要とせずに，ただ一つの部分にもとづいて文章の意味が確知されることになるから，文章が多くの部分より成ることが損なわれてしまう，というようなことがあってはならないというわけで，[文章の] すべての部分が同時に聞かれるとみなされるならば，そのときでも，時間を費やすことはまったく理にかなっていない。なぜなら，一つの部分を認識すると同時にすべての部分が聞かれることになるからである。そして，順次に聞かれるとすれば，[諸部分] それぞれが意味をもつのに，ただ一つ [の部分] にもとづいてそれ [＝文章] の意味が確知されることになるから，他 [の部分] が無益となってしまうからである。

さらにまた，[すべての部分が] 同時に聞かれるとすれば，[諸部分は] それぞれ意味に対する [表示] 能力が見られない [のであるから，たとえ集合したとしても，それら] が意味をもつということは成立しない。

[**反論**：]「集合した [諸部分] において意味が知られるから，[諸部分にもそれぞれ表示能力があるのである。したがって,] このような過誤はない。」[と言うならば。]

[**答**：] そうではない。なぜなら，[諸部分] それぞれに存在しない本質 [すなわち，意味を理解させるという本質[21]] は，集合にもありえないからである。また，["語は恒常的なものである" という汝の主張によれば,] 別個の事物 [すなわち以前の能力のない本質とは別個の能力ある本質[22]] が生起することはないからである。まず，"語は生起する" と主張する者にはこのことは決して過誤ではない。なぜなら，諸字音は，それぞれには能力がないけれども，[人間の努力によってもたらされる[23]] 特殊な補助によって [集合した状態において，意味を理解させる能力という] 付加的特性をもつので，[意味の理解という] 特定の結果 [をもたらす] ために使用されるからである。一方，[汝が主張するように] 諸部分がそれぞれ [意味を理解させる] 能力をもつとすれ

ば，[一つの部分から意味が理解されることになるから，] 他［の部分］を想定することは無益であろう。
1.3.（G.128, 21; M.86, 1; P.306,8）

もし，文章が部分をもたない単一なものに他ならないとすれば，そのときには，

> 文章が単一であるとしても，区分されない［すなわち部分をもたない］ものが順次に認識されるということはありえないから。［第250偈cd］

同じく時間の区分は理にかなっていない。実に，単一なものが順次に認識されるというのは理にかなっていない。なぜなら，［単一なものが］認識されるものと認識されないものに区別されることはないからである(24)。そして，文章が順次に認識されるということは経験的に知られている。なぜなら，すべての文章の使用・聴聞・想起の時間は，多くの瞬間［を費やす］瞬きの順序に従って完結するからである。また，字音の本体と関わりがなく，［しかも］一つの知識［の瞬間］に顕現するような語の本体が顕現することはないからである。［その理由は，文章は］字音の順序に従って［のみ］認識されるからである。それら［諸字音］が区別されないとしても，文章の相違は［字音の］順序によってもたらされるのであるから，文章の認識は順序をもつ［のであって，同時に起こるのではない］。［そして，文章が］字音の順序による補助を必要としないのであれば，それら［諸字音］がどのような仕方で使用されても，［それらによって］何かある［一定の］文章が認識されるであろう(25)，あるいはまた，字音なしに［文章が認識されるであろう］。［しかし，実際には，字音の補助を必要とせずに文章が認識されることはないのである。］なぜなら，順序をもったそれら［諸字音］によって順序をもたない［文章］が補助されるということはありえないからである。また，順序なしに［すなわち同時に，諸字音を］使用することは不可能であるからである。そして，［順次と同時以外に］他の方法は存在しないからである。

[**反論：**]「文章において諸字音が存在するのでは決してない。[そうではなく,] それ [＝文章] は [諸字音とは別個の] まさに単一な語の本体であって, [語の本体を] 顕現させるもの [すなわち音声] の順序によって, 順序をもって, また字音という部分をもって顕現するのである[26]。」と言うならば。

[**答：**] 順序をもった顕現させるものによって順序をもたないものが顕現するということはすでに論駁している[27]。[単一なものが] 顕現しておりかつ顕現していないというのは矛盾であるからである。また, 文章が字音という区分をもたないとすれば, [人が] 一部を聞いたときに不完全な文章を認識するということはないであろう。単一なものに部分は存在しないからである。[したがって, 人は,] 完全 [な文章] を聞くであろう, あるいは何も [聞か] ないであろう[28]。

すべての字音 [それぞれによって惹起される] 潜在印象を伴った最後の知識 [＝最後の字音を対象とする知識] によって文章が確知される[29]という [想定] も誤りである。なぜなら, 字音の本体と関わりのないそれ [＝文章] を誰もいかなる時にも認識しないからである。また, 諸字音は順序なしには認識されないのであるから, どうして, 文章というものが, 順序をもたず, [しかも,] 一つの知識によって把捉されるものであるのか。そして, 最後の字音の認識の後に, [字音とは] 別個の, 部分をもたない語の本体というものを我々は認知しない。また, [このように] 述べるこの者自身 [このような語の本体] を確知しているわけではない。ただ, [この者は]「もしこのようであれば, 私には好都合であろう。」という幸福を願うあまりに思考が錯乱して「最後の知識において完結した部分をもった語の本体が顕現する。」と, まるで夢をみているように言うのである[30]。実に, 単語および文章は [確かに] 想起されるけれども, [想起される単語や文章の] 字音が特定の順序なくして [順序をもたない最後の知識において] 確知されることはない[31]。[このように] 順序をもたない知識において [字音の] 前後関係は存在しないのであるから, それ [＝字音の前後関係] によってもたらされるようなそれら単語や文章それぞれの区別はないであろう[32]。また, 字音の順序をもたない, [諸字音とは] 別個の語

の本体を我々は見ない，ということはすでに述べている[33][34]。

1.4.（G.129, 21; M.86, 21; P.307,7)

あるいはまた［そのような文章が］存在するとすれば，それは恒常的なものであるか，非恒常的なものであるか，いずれかであろう。

もし，

> 非恒常的なものである［なら］，［人間の］努力から生起したものである［から，］それ［＝文章］がどうして人為的なものでないのか。[35]［第251偈ab］

実に，非恒常的なものは必ず何かある［原因］から生起するものである。すなわち，存在性が原因によらないとすれば，場所等[36]が定まることはないであろう，ということはすでに述べている[37]。そして，それ［＝文章］は，［人間の］努力によって発動する完全な発声器官をもった者たちに見られるのであって，そうでなければ［すなわち，発言意欲がない場合，あるいは発声器官が完全でない場合には[38]］，［見られ］ない。したがって，［人間の活動が有れば文章があり，無ければ無いという］原因の性質が見られるから，人間の活動こそが［文章の］原因である。このゆえ，［文章は］人為的なものであろう。

1.5.（G.130, 2; M.86, 27; P.307,13)

> ［文章が］恒常的なものであるとしても，［文章は］常に認識される［ことになろう］。なぜなら，［恒常的なものには］妨げが存在しないからである。
> ［第251偈cd］

もし，そのような語の本体［＝文章］が恒常的なものであり，かつ認識可能な本性をもつとすればである。そして，それ［＝文章］のそのような［認識可能な］本性はいかなる時にも失われないから，常に認識されるであろう。実に，このようにして，それ［＝文章の本性］は恒常的なものとなるであろう，もし［知識を生起させるという］能力を決して失わないのであれば。なぜなら，知

識を生起させる能力が［語］それ自体であるからである。また，［知識を生起させる能力が語とは］別個の事物であるということは以前に否定されているからである(39)。そして，認識可能な本性をもつそのような［恒常的な文章］にはいかなる認識の妨げも存在しない。なぜなら，それ［＝妨げ］は，たとえ存在していても，それ［＝恒常的な文章］の本性を消失させるのでなければ，［知識を生起させる］能力を覆い隠すことは不可能であるからである。そもそも，それ［＝本性］に対して付加的な特性を生起させないものは“何かをなすもの”とは呼ばれない。そして，何もなさないような何が何に対する“妨げ”あるいは他［の障害］となるのか，ということはしばしば述べている。

［**反論**：］「壁等は瓶等に対していかなる付加的特性を生起させて，あるいはまた消失させて，［瓶等の］妨げとみなされるのか(40)。」［と言うならば。］

［**答**：］我々は「それら［壁等］が［瓶等の］何かあるものに付加的特性をもたらす(41)。」と言っているのではない。そうではなく，瓶の瞬間すべてがすべて［の人間］の感官知の原因であるのではなく，対象と感覚器官と光とが相伴したとき，相互に，特定の別の瞬間が生起するから，［それら対象等が］知識の原因なのである。なぜなら，補助されないもの［すなわち，他のものによって付加的特性を付与されえないもの(42)］が［他を］必要とすることはありえないからである。本性に能力があるものは常に［結果を］生起させるであろう，あるいはまた，他方は［すなわち，本性に能力がないものは］決して［結果を］生起させないであろう，ということはすでに述べている。そして，それら［対象等］は，［壁等という］別個の障害物によって(43)遮られていないときに，相互に補助し合うのである。なぜなら，隔てのない場所の適合性［＝能力］を補助因としてもつがゆえに，それら［対象等］は相互に付加的特性を生起させるのであるからである。一方，［対象等が壁等によって］遮られた場合には，［隔てのない場所の適合性という］原因が存在しないがゆえに能力のある別の瞬間が生起しないから，知識は生起しないのである。以上のことから，前に生起した［感覚器官等の］能力のある［瞬間］は［自ずから］消滅してしまうのであるから，壁が存在する場合には生起しようとしている別の［能力の

ある瞬間］が［上に述べたような］原因が存在しないことによって生起しない［という理由］で，原因が不完全なるがゆえに［瓶等の］知識が生起しないから，壁等が“妨げ”と言われるのであって，前の［知識を生起させる］能力のある［瓶等］が妨害されるからではない。なぜなら，それ［＝知識を生起させる能力のある瓶等］は［たとえ壁等が近くにあっても］本性を失うことがないからである。

あるいはまた，［瓶等の］瞬間的な存在物に対する［壁等によってもたらされる］相互の補助が存在することもある。原因や補助因の能力を一切智者でない者が思慮することはできないからである。それゆえに，感覚器官と対象の間にあるそのような妨げは，知識の生起と不完全性の段階的差異の相違によって，それら［感覚器官や対象］に付加的特性をもたらすこともあるであろう。妨げの相違(44)によって，音声等(45)に対する聴覚［等(46)］の鋭さや鈍さが見られるからである。そうでなければ(47)，何もなさない［妨げ］がどこか近くに存在していても，存在しないのと同じであるから，“それ［＝語］のこれ［＝妨げ］”という関係(48)は概念知によって構想されたものに他ならず，実在を拠り所とするものではないであろう。そして，付託に随順するものは有効な働きをなすものではない。実に，“［少年は］火である”と比喩表現されるからといって，少年が煮炊きに用いられることはないのである。それゆえに，たとえ概念知が存在していても，存在物は，それ［＝概念知］によって変異することなく，本性のままに活動する(49)のみであろう。それゆえに，妨げが存在していても，感覚器官等は必らず［対象を］知らしめるであろう［すなわち知識を生起させるであろう］。しかし，［実際には，］このようなことはないのである。それゆえに，［感覚器官等は］それ［＝妨げ］によって特殊性が付与されるのであると理解される。恒常的な語については，何かある［特定の妨げ］が存在する場合に同じように付加的特性が消失するということ，あるいはまた［付加的特性が］生起するということは決してない。それゆえに，もし，それら［恒常的な語］に知識を生起させるという本性があるなら，［語は，］すべて［の人間］に，常に，自己を対象とするすべての知識を同時に生起させるであろう。もし［知識を生

起させるという本性が］ないのであれば，［語は，］いかなる時にも，誰にも，いかなる［知識］も［生起させ］ない［であろう］，というこのことは必然である。

［反論：］

もし「何かある補助因が不完全であるから，［恒常的なものであっても，語は常には］聞かれないのである。」と言うならば。［第252偈 ab］

次のように言うかもしれない。「常にすべての語が聞かれることがないのは，妨げがあるからではない。そうではなく，それら［恒常的な語］を認識するための何かある定まった補助因が存在する。［そして，］それ［＝補助因］は，ある時，ある［語］に存在するのである。というわけで，それら［恒常的な語］がある時ある場所で聞かれるのは(50)，そ［のような補助因］に惹起されてである。」と。

［答：］

他［＝補助因］を必要とするとしよう。しかし，［以前の本性のままに］定まるというのは［それと］矛盾する。(51)［第252偈 cd］

実に，我々は原因の補助因を否定しはしない。それどころか，原因はその存立を助ける［補助因］を(52)まさに必要とするのである。なぜなら，それ［＝補助因］から得られる付加的特性が結果［を生起させるため］に使用されるからである。同様に，もし，［ヴェーダ聖典の］語も，何かある［補助因］を必要として，結果［すなわち，自己を対象とする知識］をもたらすのであれば，もたらすがよかろう。［しかし，］以前の本性のままに定まるというこのようなことにはならないであろう。なぜなら，それ［＝以前の本性］は消失しているからである。そして，必要とされるもの［＝補助因］から［新しい］別の本性が獲得されるからである。実に，「補助をなさないものは必要とされない。」という

ことはすでに述べている。そして，「それの補助が異なる事物であるとすれば，“それの［補助］”という関係が存在しない。」云々もすでに述べている。また，それ［＝語］は認識されえない［ものとなってしまう］。なぜなら，［補助因によってもたらされ，語とは別個の事物である］補助そのものから知識が生起するからである。

以上のことから，この語は，［聴覚器官という］感覚器官も，［感覚器官と対象の］接触も，アートマンも，あるいはまた知識を生起させるための何か別の拠り所［＝補助因(53)］も，自己［を対象とする］知識を生起させるために，必要としないことになる。なぜなら，すべてのものがそれ［＝恒常的な語］に対しては何もなさないからである。

［未完］

略号および使用テキスト（追加）

［プラマーナ・ヴァールティカ原典］

P　：*The Pramāṇavārttikam of Ācārya Dharmakīrti with the Commentaries Svopajñavṛtti of the Author and Pramāṇavārttikavṛtti of Manorathanandin* ed. by Ram Chandra Pandeya, Delhi 1989.

［その他のテキスト］

GP　：Gopālikā
The Sphoṭasiddhi of Ācarāya Maṇḍanamiśra with the Gopālikā of Ṛṣiputra Parameśvara, ed. by S. K. Rāmanātha Śastrī, Madras University Sanskrit Series No. 6, Madraṡ 1931.

TS　：Tattvasaṃgraha
Tattvasaṅgraha of Śāntarakṣita with the Commentary Kamalaśīla, ed. by E. Krishnamacharya, Gaekwad's Oriental Series Nos. XXX-XXXI, Baroda 1926.
Tattvasaṅgraha of Ācārya Shāntarakṣita with the Commentary 'Pañjikā' of Kamalashīla, ed. by Swami Dwarikadas Shastri, Bauddha Bharati Series-1, 2, Varanasi 1968.
（引用にあたっては，Gaekwad 本を先に，Bauddha Bharati 本を後に示した。）

TS　：Tattvasaṃgrahapañjikā
（TS の出版に含まれる）

VP　：Vākyapadīya

Bartṛharis Vākyapadīya die Mūlakārikās nach den Handschriften herausgegeben und mit einem Pāda-Index versehen von Wilhelm Rau, Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes Band XLII, 4, Wiesbaden 1977.

SS : Sphoṭasiddhi

Sphoṭa Siddhi (La démonstration du sphoṭa) par Maṇḍana Miśra, introduction, traduction et commentaire par Madeleine Biardeau, texte sanskrit établi par N. R. Bhatt avec la collaboration de T. Ramanujam, Publications de l'Institut français d'Indologie n°13, Pondichéry 1958.

註

本稿は，「ダルマキールティの聖典観——『プラマーナ・ヴァールティカ』第1章および自註の和訳 (1) ——」(『哲学年報』第47輯，1988)，「ダルマキールティの聖典観——『プラマーナ・ヴァールティカ』第1章および自註の和訳 (2)——」(『西日本宗教学雑誌』第10号，1988)，「ダルマキールティの聖典観——『プラマーナ・ヴァールティカ』第1章および自註の和訳 (3)——」(『哲学年報』第48輯，1989) に続くものであり，略号等はこれらに従う。

なお，ダルマキールティの聖典観に関して，前稿以後，以下の論文が発表されている。

秋本勝「アーガマ論ノート—PVSV 350-355 和訳—」(『筑紫女学園大学紀要』第1号，1989，pp.1-7)

(1) 語に関する選択肢として，字音 (varṇa)，単語 (pada)，文章 (vākya) の三つを挙げるのが通例であるが，ここでは単語は文章という選択肢に含まれている。Cf. K. 459, 24.

(2) 以下，字音の非人為性が取り上げられる。語の本質は字音に他ならないという説はウパヴァルシャに由来し，ミーマーンサー学派はこれを採用している。Cf. ŚBh. 38, 3-4.

(3) K. 460, 9-10：「ヴェーダ聖典の a 音等が異ならないように，世間の［a 音等も異ならない］。同一であると再認されるからである。」(yathā vaidikā akārādayo 'bhinnās tathā laukikā api. ekatvena pratyabhijñāyamānatvāt.)

(4) K. 460, 13-14：「世間の字音とヴェーダ聖典の字音が相違する場合に見られる再認知はヴェーダ聖典の字音においても区別されないから，同一性に対して逸脱する再認知にもとづいて，どうしてヴェーダ聖典［の字音］の同一性が成立するのか，という意味である。」(laukikavaidikavarṇabhede dṛṣṭasya pratyabhijñānasya vaidikeṣu varṇeṣv aviśeṣāt, ekatvavyabhicāriṇaḥ pratyabhijñānāt kathaṃ vaidikānām ekatvaṃ sidhyatīty arthaḥ.)

（5） 再認知を区別して，ヴェーダ聖典の字音以外のものに見られる再認知は，異なるものを同一であると認識する錯誤知であるとすれば，それ以外のもの，例えば瓶等が，再認知にもとづいて同一であると認識されないことになってしまう。Cf. K. 460, 16-19; Ś. 348b^{7}-349a^{2}; 289b$^{1-3}$.

（6） 以上の議論は，NAVV. 36, 17-22 に要約した形で述べられている。

（7） 以下，文章の非人為性が取り上げられる。ここで扱われる“字音とは別個の文章”とは，直接言及されてはいないけれども，文法学派の主張する“スポータ”を意識したものに他ならない。このことは，Tattvasaṃgraha (k.2704cd＝2703cd ff.) のスポータ批判との対応がみられること，また，Maṇḍanamiśra の Sphoṭasiddhi に反対論者の見解として，Pramāṇavārttikasvavṛtti の文章が引用されているということから明らかである。Sphoṭasiddhi に引用がみられることは，伊原照蓮博士（「佛教と文典派」『日本佛教學會年報』第26號，1961，pp.175-194）によって指摘され，Sphoṭasiddhi の当該箇所の約半分 (99, 7-100, 9) が和訳され，Pramāṇavārttikasvavṛtti との対応も示されている。したがって，紙数の関係もあり Sphoṭasiddhi の引用文との個々の対応関係には立ち入らないこととする。

（8） K. 461, 5-6：「例えば，d 音が顕現しているときに，それと同時に二番目の字音が顕現することはない，それと同様に［d 音が顕現しているときに］単語や文章が顕現することはない。」(yathā dakāre pratibhāsamāne tatsamānakālam eva dvitīyo varṇo na partibhāsate, tadvan na padavākyaṃ pratibhāsate.)

一方，Gopālikā はこれを異類例と見ている。GP. 210, 15-16：「そして，これは“第二の字音において前の字音の顕現とは異なる顕現が見られるようには［見られ］ない。”という異類例である。」(eṣa ca yathā dvitīyavarṇe pūrvavarṇapratibhāsavyatirekī pratibhāso dṛśyate, naivam iti vaidharmyadṛṣṭāntaḥ.)

（9） K. 461, 10-11：「一つの形象が顕現しているときに，知覚されうる別の形象がそこに顕現していないときには，別個のものとして存在しない，それと同様にである。」(yathaikasminn ākare bhāsamāne tatrāpratibhāsamānaṃ dṛśyam ākārāntaram anyan nāsti tadvat.)

一方，Gopalikā は，ākārāntaravat という語について二種の解釈を挙げている。GP. 210, 20-24：「“ākārāntaravat” とは，“第二の字音において最初の字音とは異なる形象が異なるという顕現にもとづいて確定されうる［ようには確定されない］”という異類例である。あるいはまた，“ākārāntaravat” という語は所有主接尾辞 (-vat) を付したものである。“しかし，そのようなものは別個の形象をもつものとしてはその存在が確定されない”と［いう意味である］。」(ākārāntaravad iti. yathā dvitīye varṇe prathamavarṇād ākārāntaraṃ vyatirekapratibhāsāc chakyate 'dhyavasātum iti vaidharmyadṛṣṭāntaḥ. ākārāntaravad iti matubantam vā. na ca tādṛśam ākārāntaravattayā śakyādhyavasānasattvam iti.)

(10) 例えば，“sara” という単語と “rasa” という単語は同じ字音によって構成されているけれども，意味は異なっている。Cf. K. 461, 24-27.

(11) K. 461, 29-30：「ある文章における字音と同じ字音が別の文章にあるのではない。なぜなら，人間の努力の相違によって，諸字音は文章ごとに異なって生起するからである。」(ya ekatra vākye varṇā na ta eva vākyāntareṣu, puruṣaprayatnabhedena varṇānāṃ prativākyṃ bhinnānām evotpatteḥ.)

(12) 以下のような論証式が想定される。
[主張：] 字音は単語や文章ごとに区別されない。
[証因：] “この字音は同じそれである。” と再認識されるからである。

(13) K. 462, 6-7：「切られた後再び生えてくる髪は異なっているけれども，類似性の認識によって惑わされた者には [“これは同じ髪である。” という] 再認知があるということが経験的に知られている。」(dṛśyate hi lūnapunarjāteṣu keśeṣu bhinneṣv api sādṛśyagrahaṇād vipralabdhasya pratyabhijñānam.)

(14) K. 462, 30-462, 11：avyutpannasyāpy akṛtasaṃketasyāpi.

(15) 同様の議論が NAVV. 36, 23-27 に見られる。また，TS. kk.2706-2710＝2705-2709 に，スポータの認識手段に関する批判が述べられている。

(16) K. 463, 24-25：「例えば，“少年は獅子である。” 云々という比喩表現において，それ [＝獅子] の本質をもたない少年等における獅子性等 [の性質] は構想されたものである，それと同様にである。」(yathā siṃho māṇavaka ityādiśūpacāreṣu* māṇavakādiṣv atadrūpeṣu siṃhatādikam** āropitam, tadvat. テキストは，*ityādiṣapacāreṣu, **siṃhādiṣu。)

(17) K. 464, 25-26：「時間を費やして文章の意味を理解することはないであろう，という意味である。」(kālaharaṇena vākyārthapratītir na syād ity arthaḥ)

(18) K. 464, 26：tasya vākyārthasya. Ś.352b^{6}; 292a^{6}：yan lag dag de.

(19) K. 465, 9-12 に別の解釈が紹介されているが，これは Śākyamati の解釈に相当する。Cf. Ś.352b$^{5-7}$; 292a$^{5-6}$. ここでは，Karṇakagomin の解釈に従って訳した。

(20) K. 465, 13-14：gṛhītāgṛhītasvabhāvayor ekatvavirodhāt. viruddhayor ekatvāyogāt.

(21) K. 465, 28-29：rūpasyārthapratipādanasvabhāvasya.

(22) Cf. K. 466,10-11：pūrvakād asamartharūpād arthāntarasya samarthasya rūpasya.

(23) K. 466, 14：puruṣaprayatnakṛtād upakāraviśeṣāt.

(24) 以下，M本およびチベット訳には「認識されているものと認識されていないものが存在することはないからである。」(M. 86, 4：gṛhītāgṛhītābhāvāt. T. 495a8; 335b1：gzuṅ ba daṅ ma gzuṅ ba med paḥi phyir ro.) という文章が続くが，Gnoli はこれを後の付加とみている。また，Karṇakagomin は，この文章について

言及していないが，以下のような説明を加えている。K. 466, 22-23：「実に，それ［＝単一なもの］には，すでに把捉されている本性とは別個の本性は存在しない，［もし存在するのであれば，］それ［＝単一なものすなわち文章］が順次に把捉されることもあるであろうが。」(na hi tasya gṛhītāt svabhāvād agṛhīto 'nyaḥ svabhāvo 'sti yasya krameṇa grahaṇaṃ syāt.) ただし，Sphoṭasiddhi にはこれに対応する文章が見出される。SS. 100, 1-2：na hy ekasya krameṇa gṛhītatopapannā ; na hy ekaṃ gṛhītam agṛhītaṃ ca bhavati, virodhāt. なお，伊原照蓮前掲論文189頁参照。

(25) 例えば，"saro 'sti." と述べられた場合に，"raso 'sti."という文章が理解されることになる。Cf. K. 467, 11.

(26) このような見解は，Bhartṛhari の Vākyapadīya (VP. I, kk. 92-93) に見られる。中村元『ことばの形而上学』(岩波書店，1981) 294-295頁参照。

(27) Cf.G.128,24-25. 本訳稿49頁参照。

(28) K. 469, 5-10 は別の解釈を挙げるが，これは Śākyamati (Ś.335b$^{5-7}$; 294a^{7}-b^{1}) の解釈とほぼ一致する。それに従えば，この文章の意味は以下の通りである。「[誰もが] 完全［な文章］を聞くであろう，あるいは誰も［完全な文章を聞か］ないであろう。」

(29) この見解も，Bhrtṛhari (VP. I, K.86) に見られる。中村元前掲書282頁参照。

(30) この文章は，TSP.722,21-24 ; 877,8-10 に引用されている。

(31) 想起も，知覚と同様に，順次に起こるのである。Cf.K.470,25-26.

(32) K.470,29-471,12：「字音が特定の順序に従って顕現するからこそ，単語や文章が相互に異なるのである。それ［＝字音が特定の順序に従って顕現すること］がなければ，それ［＝単語や文章が相互に異なること］はないであろう。という意味である。」(varṇānāṃ kramaviśeṣapratibhāsād eva padavākyānāṃ parasparaṃ bhedas tadabhāve sa na syād iti yāvat.)

(33) Cf.G.128,27-28. 本訳稿49頁参照。

(34) スポータあるいは文章が部分をもつ場合および部分をもたない場合に関する同様の議論が，TS. kk.2713-2719＝kk. 2712-2718 および NAVV. 36, 28-37,11 に見られる。

(35) この偈は，NAVV. 37, 14 に引用されている。

(36) 「等」という語には時間 (kāla) および実在 (vastu) が含まれる。Cf. K.471, 20-21.

(37) Cf. G. 99, 12-14.

(38) K. 471, 23：vaktukāmatābhāve karaṇavaiguṇye vā.

(39) K. 472, 13 は，G. 117,9-10：bhāvānupakāraprasaṅgāt を引用する。

(40) K. 472, 23-24：「それゆえに，それら［壁等］は付加的特性を生起させなく

とも，瓶等の妨げと認められるように，同様に恒常的な語にも何かある妨げがあるであろう，というのが［この文章の］意図である。」(tasmād yathā te 'tiśayam anutpādayanto ghaṭādīnām āvaraṇam iṣyante, tathā nityasyāpi śabdasya kiṃcid āvaraṇaṃ bhaviṣyatīty abhiprāyaḥ.)

(41) K. 472, 25-26：atiśāyayanti viśiṣṭaṃ svabhāvaṃ kurvanti.

(42) K. 472, 29-30：anupakāryasya parair anādheyātiśayasya.

(43) G. 130, 17：pratighāṭinā を pratighātinā に訂正。

(44) K. 474, 20-21：「布切れ，布，壁等」(karpaṭapaṭakuḍyādi.) Ś.359b[4]; 297a[5-6]：「多い少ない」(maṅ po daṅ ñuṅ du.)

(45) K. 474, 21 は音声 (śabda)・香 (gandha)・感触 (sparśa) を挙げる。

(46) 視覚等も含まれる。Cf. K. 474, 21-22.

(47) K. 474, 23：「もし妨げによって特殊性が付与されないならば。」(yady āvaraṇena viśeṣo nādhīyate.)

(48) K. 474, 24-25：upasaṃhāraḥ saṃbandhaḥ.

(49) G. 131, 5：yathasvabhāvavṛttaya eva を yathāsvabhāvavṛttaya eva に訂正。

(50) G. 131, 14：chravanam を chravaṇam に訂正。

(51) K. 475, 28-29：「補助するものを必要とするのであるから，語が以前の本性にそのまま留まるというこのような定則はないであろう。」(pūrvasvabhāva eva śabdaḥ sthita ity ayaṃ niyamo na syād upakārakasyāpekṣanīyatvāt.)

(52) K. 476, 15：yathābhimatakāryajananasvabhāvāvasthopakāriṇam.

(53) K. 477, 4：vijñānotpattisamāśrayaṃ* vijñānotpattisahakāriṇam.（*テキストは，yijñāna°.)

(本稿は文部省の平成元年度科学研究費補助金（奨励研究(A)）による研究成果の一部である。)